

フレーゲにおける意義と意味

小川吉昭

序

„Über Sinn und Bedeutung“ (1892)⁽¹⁾において、フレーゲ (Gottlob Frege, 1848~1925) は「同一性」(Gleichheit, Identität) (<1>, *1)) の問題を取り上げる。a = bにおいては、異なる記号「a」と「b」とが等号(=)によって結びつけられている。この等しさと差異の本質を明らかにするにあたって、フレーゲは、周知のように、「意義」(Sinn)と「意味」(Bedeutung)の区別を導入する。

ところで、記号に「意義」と「意味」という二つの要素を認めると、二つの記号が等しさを共有しているからといって、両者を単純に置き換えるわけにはいかななくなる。二つの記号には差異があるのだから。そこで、フレーゲは、置き換えが可能な場合と不可能な場合とを区別し、「意義」と「意味」の区別という自らの主張を擁護しようとする。

本稿では、フレーゲの議論に沿って、「意義」と「意味」の区別という枠組みの中での置き換えが不可能な場合についての議論を考察する。

1 「意義」と「意味」の区別

フレーゲの議論を取り上げようとする、術語の正確な理解が不可欠である。とりわけ、「意義」と「意味」といったほとんど同義としか思えない術語が交錯する論述にあっては、それぞれの術語の守備範囲を正確に理解することが要求される。そこで、術語の整理を兼ねて、フレーゲの基本思想を確認する。

フレーゲは、記号「a」および「b」が「意味する」(bedeuten)「名指す」(benennen)「表示する」(bezeichnen)対象を「意味」(Bedeutung)と呼び、「表示されたもの[対象、意味]が与えられる様式」(Art des Gegebenseins des Bezeichneten)を「意義」(Sinn)と呼び、前者が同一性を表し、後者が差異性を表すとする(<1>~<2>)。

さらに、フレーゲは、記号が「個別の対象の表示」である場合を「固有名」(Eigenname)と呼び、いわゆる固有名詞だけでなく、「複数の語あるいは他の記号から成る」記号(ラッセルの「表示句」(denoting phrase)⁽²⁾、とりわけ確定記述)をもこれに含め、固有名全般に「意義」と「意味」の区別を認める(<3>)。

「固有名(語、記号、記号結合、表現)は、その意義を表現し、それと共に、その意味を意味する、あるいは、表示する。」(Ein Eigenname (Wort, Zeichen, Zeichenverbindung, Ausdruck) drückt aus seinen Sinn, bedeutet oder bezeichnet seine Bedeutung.) (<12>)

「私たちは、記号でもってその意義を表現し、記号でもってその意味を表示する。」(Wir drücken mit einem Zeichen dessen Sinn aus und bezeichnen mit ihm dessen Bedeutung.) (<12>)

続いて、フレーゲは、一般的に、「主張文」(Behauptungssatz)に対しても「意義」と「意味」の

区別を認める。すなわち、「主張文」の場合、それによって表されている「思想」(Gedanke)が「意義」であり、その「真理値」(Wahrheitswert)が「意味」であるとする (<14>~<15>)。

出発点は、「主張文が思想を含んでいる」という事実である。「思想」とは、「思惟という主観的行為」ではなくて、「多くの人の共有財産」となる「思惟の客観的内容」である。問題は、「この思想は、主張命題の〈意義〉とみなされるべきか、それとも、〈意味〉とみなされるべきか」である (<14>,*5)。

この問題を検討するにあたって、フレーゲは、まず、「明けの明星は太陽に照らされた物体である」(der Morgenstern ist ein von der Sonne beleuchteter Körper) といった「文が意味を有する」と仮定する。(この段階では、文の「意味」は特定されていない。おそらく、「固有名」において「意義」は異なっても「意味」は変化しないのと平行に、ここでの「意味」も〈変化しない〉という特徴だけは指摘できよう⁽³⁾。)次に、「明けの明星」を「宵の明星」で「置き換える」とする。このとき、「明けの明星」と「宵の明星」では、「意義」は異なっているものの「意味」は同じである。したがって、置き換えが「命題の意味に影響を及ぼすことはありえない」はずである。

ところが、この置き換えによって文の「思想は変化する」。その理由として、フレーゲは、「宵の明星が明けの明星であることを知らない」人であれば、「一方の思想を真と見なし、他方の思想を偽とみなすであろう」という点を指摘する。文の「意味」は変化しないにもかかわらず、「思想」は変化するから、「思想」が文の「意味」ではありえない。このことから、「思想」は文の「意義」であるとされるのである (<14>)。

「それ故、思想が命題の意味であるということとはありえない。むしろ、思想は〔文の〕意義と解されなければならない。」(<14>)

置き換えによって文の「思想」が変化するという点に関して、フレーゲが挙げる理由は論点先取の感を否めない。「思想」が「真」であるか「偽」であるかは、文の「意味」が導入されて初めて問題になるべき事柄であろうから。そこで、フレーゲのあまりに簡潔な説明を何ほどかパラフレーズしてみよう。

「明けの明星は太陽に照らされた物体である」の中の「明けの明星」を「宵の明星」に置き換えると、文の何かが変わる。その変化をもたらすのは、これら二つの語句の「意味」ではなくて「意義」である。なぜなら、いずれの「意味」も金星であって、そこに違いはないからである。違いは、金星が「与えられる様式」すなわち「意義」だけである。「明けの明星」と「宵の明星」の「意義」の違いが文に変化をもたらすのであれば、文にあって変化するものも「意義」であろう。したがって、置き換えによって「思想」が変化するのであれば、「思想」は文の「意義」とみなされうるのである。

次に問題になるのは、文の「意味」である。「では、〈意味〉の方はどうなるのか。」フレーゲは、「もしかしたら、命題は、全体として、意義を有するだけで、意味は有していないのでは？」という疑問に対して、文「オデュッセウスは、深く眠ったまま、イタカの砂浜に措かれた」の要素である「オデュッセウス」が「意味」を有するか否かが問題となりうることが「文そのものにも一般に意味を認め、要請していることの証」であるとして、次のように主張する (<14>)。

「それ故、真理の希求 (Streben) は、意義から意味へと迫るべく、あらゆる場面で私たちを駆り立てるものなのである。」(<14>)

この引用箇所からもわかるように、フレーゲにとっては、「意味」が問題となるのは「真理の希求」

に突き動かされるからであり、「意味」にとって重要なのは「真理値」(Wahrheitswert)であり、「真理値」こそが文の「意味」なのである。

「それ故、各々の主張文は、そこにおいて語句の意味が問題になっている場合には、固有名と捉えられるべきである。しかも、その主張文の意味は、それがあるとして、真あるいは偽のいずれかである。」(<14>)

文の「意味」を「真理値」とすると、当然のことながら、異なる文の「意味」の「個別性が消えてしまう」ことになり、「すべての真なる命題が同じ意味を有する一方で、他方、すべての偽なる命題も同じ意味を有する」ことになる。すると、多くの異なる文によってもただ一つの「認識」(Erkenntnis)があるだけになりそうである。しかし、フレーゲは、文の「意義」(「思想」)だけでは「認識」とはいえず、「意味」(「真理値」)だけでも「認識」とはならず、「思想は、その意味すなわち真理値と一緒に初めて認識を与える」と主張する。すなわち、「認識」が成立するには「判断」を下さざるをえないが、この「判断」において「思想からその真理値へと進む」のであり、上の「個別性」は「真理値の内部」で「思想へと戻ることによって」「諸要素を区別する」ところに保持される、というのである (<18>)⁽⁴⁾。

2 置き換え問題

ところで、 $a = b$ において、記号「a」と「b」の等しさを「意味」が担っている限り、「ある文要素がそれと同じ意味を有しはするが別の意義を有する表現と置き換えられても、真理は不変でなければならない」(<17>)し、「文中の表現を同じ意味 (gleichbedeutend) の表現で置き換えも、文の真理値に影響を与えない」はずである。ましてや、文の「意味」が「真理値」であるなら、「他の文を要素として含む文の真理値は、その要素文 (Teilsatz) に真理値が同じ他の文を代入しても、不変でなければならない」はずである (<19>)。

しかし、同時に、記号「a」と「b」には差異もあり、この差異をそれぞれの記号の「意義」が担っている限り、上述の「置き換え」が常に可能であるわけではない。先の例でいえば、「明けの明星」を「宵の明星」に置き換えると「意義」は変化する。この変化に応じて、「明けの明星は太陽に照らされた物体である」と「宵の明星は太陽に照らされた物体である」とでは「意義」すなわち「思想」が変化する。したがって、「意味」レベルでは「置き換え」が可能であっても、「意義」レベルでも可能であるわけではないのである。

フレーゲは、「文の真理値はその文の意味である」という自らの「推測」を「検証」するにあたって、「副文」(Nebensatz)を取り上げる (<19>)。

「副文にも、その意味が真理値であるということが同様に当てはまるであろうか。」(<19>)

そして、「副文の意味は真理値ではない」という「推測」をたて、「文要素」(Satzteil)と同様に、副文は「意義として思想を有するのではなくて、ただ思想の要素だけを有する」ことを明らかにしていく (<19>)。

自らの主張を検証するために、主張に反する事例を事細かに検討するという、フレーゲのたった議論の道筋は、長い回り道でしかないように思える。ましてや、検討の結語が「副文を同じ真理値の他

の副文によって置き換ええない場合があるからといって、〈真理値が命題の意味であり、命題の意義は思想である〉という私たちの見解を反証することにはならない」という否定文で述べられたのでは、いかに「十分な確からしさ (Wahrscheinlichkeit) をもって明らかになる」と強調されようと、迂遠の誹りを免れないように思える (<45>)。

しかし、フレーゲが擁護しようとする「見解」が「意味」レベルの議論であり、副文について細かに検討する事柄が「意義」レベルの問題であることさえ押さえておけば、次のことは納得できよう。すなわち、副文をめぐる展開される検討内容は、フレーゲの見解にとって「反証することにはならない」どころか、確証となるのである。

上記の「推測」を検討するにあたって、フレーゲは、「論理的に同種であるものは一纏め」に論じていく (<19>)。そして、フレーゲが何を「論理的に同種」とみなしているかは、次の二箇所に示されている。

【引用 1】

「〔①〕 副文は、たいていの場合、意義として思想を有しておらず、ただ思想の要素を有しているだけであり、したがって、意味として真理を有してもいない。その根拠は、次のいずれかにある。〔①-a〕 副文においては、語句はその間接的な意味を有し、そのため、副文の意義が思想とならず、副文の意味が思想となるか、あるいは、〔①-b〕 副文は、その中の無規定的に示唆するだけの構成要素を含むが故に不完全であり、そのため、主文と連関することで初めて思想を表現するかの、いずれかにある。」 (<40>)

【引用 2】

「言語という形で示されるすべての可能性を網羅するのは困難である。それでも、副文を、文構造全体の真理値を損なうことなく、同じ真理値の他の副文で代用するわけにはいかないことの理由が本質的には見出せた、と期待している。その理由とは、次の二つである。

〔①〕 副文は、思想の一要素だけを表現するのであるから、真理値を意味しない

〔②〕 副文は、確かに真理値を意味するのではあるが、そのことだけに制限されてはいない。というのも、副文の意義は、一つの思想の他に、他の思想の一要素も包摂しているからである。第一の場合になるのは、次のときである。

〔①-a〕 語句の間接的な意味のとき

〔①-b〕 命題の要素が、固有名ではなくて、ただ無規定的に示唆するとき。

第二の場合には、〔②-a〕 副文が二重に受け取られるということがありうる。すなわち、まずは、通常の意味において、次に、間接的な意味において。あるいは、〔②-b〕 副文の一要素の意義が同時に他の思想の構成要素である、ということもありうる。後者の思想は、副文において直接的に表現されている思想と一緒にあって、主文及び副文の意義全体をなす。」 (<44>)

「引用 1」は、上記の「推測」にしたがって「副文の意義が…自立的な思想とはならない事例」の考察のまとめの位置で述べられている (<19>)。これに対して、「引用 2」は、「どうしてもこれらの区分にぴったり当てはまらない事例」についての考察のまとめの位置に登場する (<41>)。つまり、「引用 2」は考察全体のまとめであり、「引用 1」の内容をも含んでいる。「引用 1」と「引用 2」に共通

する項目に [①-a] と [①-b] の番号を振り、「引用 2」で追加される項目に [②-a] と [②-b] の番号を振ると、フレーゲが「論理的に同種であるもの」とするのは、都合四種類ということになる。以下、各々について見ていくことにしよう。

3 間接的な意味 [①-a]

フレーゲが最初に考察するのは、副文の「意味」が「真理値ではなく」、「間接的な意味」となる場合である。「間接的な意味」は、「直接話法」(gerade Rede) と「間接話法」(ungerade Rede) を通じて導入される。

直接話法で「他者の語句」に言及する場合、話者自身が発する「もとの語句」は、通常の「語表記」(Wortbild) では「引用符」(Anführungszeichen) で括られ、「他者の語句」を「意味する」。これに対して、「他者の語句の方になってはじめて、通常の意味を有する」。したがって、「引用符で括られた語表記」は、「記号の記号」であって、「通常の意味に解してはならない」とされるのである (<5>)。

このように、「記号の記号」の「意味」が「他者の語句」であるなら、「記号の記号」についても「意義」がなければならない。そして、この「表現, A' の意義」(der Sinn des Ausdrucks, A') は、間接話法において語られる (<6>)。

「ここから次のことが明らかになる。この [間接] 話法においても、語は、通常の意味を有してはならず、通常は語の意義であるものを意味する。簡潔に表現して、次のように言うことにする。間接話法においては、語は、間接的に使用される、あるいは、〈間接的な意味〉を有する、と。」(<6>)⁽⁵⁾

こうして、語句の「間接的な意味」を意義として導入したフレーゲは、これを命題へと拡大していく。語句と同様、文も「意義」と「意味」を有する。通常のであれば、「思想」が文の「意義」であり、「真理値」がその文の「意味」であるが、文が直接話法と間接話法で用いられると、先の語句の場合と同様、その文の「意味」が変化する、というのである。

「〈直接話法〉においては、文は、そのまま一つの文を意味し、〈間接話法〉においては、思想を意味する。」(<19>)

間接話法の副文が「『daß』に導かれる」(<20>) ことから、フレーゲは、「『daß』に導かれる抽象的な名詞文」全体に「間接的な意味」を導入し、次のように述べる。

「副文が意味として有するのは、思想であって、真理値ではない。」(<20>)⁽⁶⁾

この主張を検討するために、フレーゲは、「コペルニクスは、惑星の軌道は円である、と思った」(Kopernikus glaubte, daß die Bahnen der Planeten Kreise seien) と「コペルニクスは、太陽の動きという見かけは地球の実際の動きによってもたらされる、と思った」(Kopernikus glaubte, daß der Schein der Sonnenbewegung durch die wirkliche Bewegung der Erde hervorgebracht werde) を取り上げる。前者の副文を主文から切り離してそれだけでみれば、「惑星の軌道は円である」は偽であり、後者の副文を主文から切り離せば、「太陽の動きという見かけは地球の実際の動きによっても

たらされる」は真である。しかし、いずれの複合文も真である。ということは、副文の「思想が真であろうと偽であろうと、そのことは全体の真理値にとってどうでもよいことである」。したがって、副文は「真理値」を意味してはいないのである (<21> ~ <22>)。

こうした例として、フレーゲは、「言う」(sagen)、「聞く」(hören)、「思う」(meinen)、「確信する」(überzeugen)、「結論する」(schließen)等々と並んで、「…のようにみえる」(es scheint, daß...) (これは、「私には、…のようにみえる」(es scheint mir, daß...)あるいは「私は、…と思う」(ich meine, daß...)である)と、「喜ぶ」(sich freuen)、「残念がる」(bedauern)、「同意する」(billigen)、「非難する」(tadeln)、「望む」(hoffen)、「恐れる」(fürchten)を挙げている (<20>)。

第二に、フレーゲは、「命令する (befehlen)、依頼する (bitten)、禁止する (verbieten) に続く」副文を取り上げる。これらの副文は「直接語法では、命令形として現れる」。命令形で表されるのは「思想ではなく」「命令や依頼」である。したがって、この場合の副文は、「思想」表すのではなく、「命令、依頼等々」を表している。しかし、そこで表されているものが「思想」であるか「命令や依頼」であるかは問題ではない。問題なのは、この場合にも「副文は、意味を有さず、意義だけを有する」という点である。すなわち、副文の「意味は真理値ではない」という点である。この限りにおいて、「命令や依頼」も「思想と同じ段階にある」とされるのである (<24>)。

第三に、フレーゲは、「…かどうかを疑う (zweifeln, ob)、何であるのか知らない (nicht wissen, was)」という「従属疑問」を取り上げる。この場合に副文によって表されているのは、「思想」でも「命令や依頼」でもなく、(フレーゲ自身は、ここでは言っていないが)「疑問」である。しかし、「副文」によって表されているものが異なるにもかかわらず、「間接的な意味で受け取られなければならない」という点で前二者と共通なのである (<25>)。

4 無規定性 [①－b]

次にフレーゲが取り上げるのは、「無規定 (unbestimmt) に示唆するだけの構成要素を含む」「不完全」な副文である (<40>)。そうした副文として、フレーゲは、名詞文、形容詞文、副詞文を取り上げるが、それぞれの無規定性には幅があるように思われる。そこで、作業仮説として、次のように見立てておこう。

上の事例では、副文を主文から切り離してそれだけでみても、副文について真・偽がいえた。これに対して、ここで「不完全」とされる副文は、それだけを取り出して真・偽がいえるわけではなく、文としての機能を果たしておらず、主文に付属する語句として「主文と連関することで初めて、思想を表現する」(<40>)。つまり、文としては不完全で、独立しては使用されない。このような「自立性」(selbständig) (<30>)の欠如を「無規定性」のメルクマールとしてみよう。

そのような事例としてフレーゲが最初に取り上げるのは、副文の「語句は普通の意味を有するのではあるが、それでも、意義として思想が登場することはないし、意味として真理値が登場することもない」場合である (<27>)。その例として、次の文を取り上げる。

「惑星の軌道が楕円形であることを発見した人は、悲惨のうちに死んだ」(Der die elliptische Gestalt der Planetenbahnen entdeckte, starb im Elend.) (<27>)

この例でいえば、副文は「惑星の軌道が楕円形であることを発見した(人)」である。私たちは、その人物がケプラーであることを知っている。したがって、この副文はケプラーを意味しており、「普

通の意味を有する」といえる。しかし、この場合の「普通の意味」は、フレーゲが「固有名」一般に認める「意味」である。そうであれば、この種の副文は、いわば確定記述とみなされるべきものであって、形の上では文であっても、文の機能を担っていないというべきであろう。したがって、この副文では、文のように「意義として思想が登場することはないだけでなく、意味として真理値が登場することもない」のである。

ところで、この副文の意味がケプラーであって「真理値」ではないという点に、先の「間接的な意味」を当てはめると、「惑星の軌道が楕円形であることを発見した(人)」はケプラーという「意味」にとつての「意義」とみなせるであろう。そうであれば、この「意義」は「副文」の「間接的な意味」とみなしうのではないだろうか。

このようにいうと、「惑星の軌道が楕円形であることを発見した(人)」は、ケプラーにとつての「意義」であるとしても、副文そのものであって、そうであれば、文としての「意義」つまり「思想」を表している、と反論されそうである。この反論は、あくまでも副文を文として扱い、副文が「思想」を表すことを堅持しようとする立場からのものである。このような反論に対して、フレーゲは次のような再反論を展開する (<28>)。

上記の例が「〈惑星の軌道が楕円形であることを発見した人がいた〉という思想を含んでいる」とすると、否定は、

～ (惑星の軌道が楕円形であることを発見した人がいる、そして、惑星の軌道が楕円形であることを発見した人は悲惨のうちに死んだ)

となる。この否定を分配法則にしたがって書き換えると、

～ (惑星の軌道が楕円形であることを発見した人がいる)、または、～ (惑星の軌道が楕円形であることを発見した人は悲惨のうちに死んだ)

となる。これを書き換えると、次の文になる。

「惑星の軌道が楕円形であることを最初に認識した人は、悲惨のうちに死んだのではないか、あるいは、惑星の軌道が楕円形であることを発見した人はいない」(der die elliptische Gestalt der Planetenbahnen zuerst erkannte, starb nicht im Elend, oder es gab keinen, der die elliptische Gestalt der Planetenbahnen entdeckte) (<28>)

もちろん、「惑星の軌道が楕円形であることを発見した人は、悲惨のうちに死んだ」の否定は、上記の否定文の前半「惑星の軌道が楕円形であることを最初に認識した人は、悲惨のうちに死んだのではない」である。したがって、副文は、文としての「意義」つまり「思想」を含んでいないのである⁽⁷⁾。

次にフレーゲが取り上げるのは、形容詞文である。そして、一例として、「0より小さい4の平方根」(die Quadratwurzel aus 4, die kleiner ist als 0)を取り上げる。これは、言うまでもなく、「4の負の平方根」(die negative Quadratwurzel aus 4)と同義である。この例では、「0より小さい」という形容詞文は、「負の」という形容詞に置き換えられている。すなわち、「形容詞文は、形容詞と同じとみなされうる」のであり、したがって、「形容詞文」も、「先の名詞文と同様、意義として思想を有することも、また、意味として真理値を有することもありえない」のである (<30>)。

続いて、フレーゲは、副詞文を取り上げる。まずは、「場所、時点、時間」を表す副詞文について、続いて、「条件」を表す副詞文について論じる。

「場所、時点、時間」は「対象」とみなされうるが故に、「特定の場所、特定の瞬間あるいは時間の言語的表示」は「固有名」として扱うことができる。そして、「場所や時間」の副詞文は、「先に名詞文と形容詞文についてみたのと同様」に、文としてではなく、副詞として機能するのである (<31>)。

「文『シュレスウィッチ・ホルシュタインをデンマークから奪った後、プロイセンとオーストリアは不和に陥った』(nachdem Schleswig-Holstein von Dänemark losgerissen war, entzweiten sich Preußen und Osterreich)の意義は、『デンマークからのシュレスウィッチ・ホルシュタインの奪取後、プロイセンとオーストリアは不和に陥った』(nach Losreißung Schheswig-Holsteins von Dänemark entzweiten sich Preußen und Osterreich)という形式で言い表すこともできる。」(<31>*10)

この例では、「シュレスウィッチ・ホルシュタインをデンマークから奪った後」という副文が、「デンマークからのシュレスウィッチ・ホルシュタインの奪取後」という前置詞句に置き換えられている。すなわち、この副文は、文として機能しているのではなく、副詞句でしかないのである⁽⁸⁾。

最後に、フレーゲは、副詞文の「条件」を取り上げるが、「先に名詞文、形容詞文、副詞文についてみたのと同じように」と述べられているものの、その内容はかなり異質である (<32>)。

「名詞文」「形容詞文」「副詞文」(場所、時点、時間)のいずれにおいても、「副文」は、文としては機能しておらず、それぞれ「固有名」「形容詞」「副詞(あるいは固有名)」によって代替可能であった。つまり、文としての自立性を欠くという「無規定性」が共通性として指摘された。ところが、「条件文」においては、対象そのものが「無規定的[不定]に示唆する構成要素」となっているのである。フレーゲが挙げる最初の例

「ある数が1より小さく、かつ、0より大きいならば、その数の平方もまた、1より小さく、かつ、0より大きい」(wenn eine Zahl kleiner als 1 und größer als 0 ist, so ist auch ihr Quadrat kleiner als 1 und größer als 0) (<32>)

でいえば、前件の「ある数」も、後件の「その数」も、「固有名」の意味する対象とは異なり、特定の対象を意味していない。したがって、「条件文」においては、副文の機能が「固有名」「形容詞」「副詞(あるいは固有名)」の機能に取って替わられるわけではないのである⁽⁹⁾。

このような「無規定性」について、フレーゲは、前件(副文)に登場する構成要素と後件(主文)に登場する構成要素の「両者が互いを指し示し合うこと」によって「一つの全体」すなわち「唯一の思想」を表現する、と述べる。前件である副文は、「唯一の思想の要素」を表しているだけで、それだけで完結する自立的な「思想ではない」のである (<32>)。

もちろん、前件(副文)が「意義」として完全な「思想」を表していない以上、この副文の「意味」は「真理値」ではありえない。条件を表す副文は、こうして、「意義」も「意味」も有していないことになるのである。

5 過剰 [②-a、②-b]

次に [②] フレーズが取り上げるのは、これまでのケースとは違って、副文が「真理値を意味する」にもかかわらず、置き換えが成立しない場合である。この場合、副文は「一つの思想の他に、他の思想の一要素も包摂している」とされる。副文が「思想」をいわば〈過剰〉に有しているのである。

「私たちは、どうやら、ほとんどいつも、実際に口に出して言う主思想 (Hauptgedanke) に [さまざまな] 副思想 (Nebengedanke) を結びつけているようである。そして、聞き手もまた、[これらの] 副思想を、表現されていないにもかかわらず、心理的法則にしたがって、私たちの語句と結びつけているようである。それどころか、副思想は、ほとんど主思想と同じように、ごく自然に私たちの語句と結びついて現れるため、私たちは [意図的に] そうした副思想も一緒に表現しようとさえするのである。」 (<41>)

そうした事例のうち、第一のグループ [②-a] は、副文が「通常の意味」と「間接的な意味」という「二重」(doppelt) の意味を含んでいる場合である。次の例でいえば、

「ベーベルは、アルザス-ロレーヌの返還によってフランスの復讐心を和らげることができると、錯覚している」(Bebel wähnt, daß durch die Rückgabe Elsaß-Lothringens Frankreichs Rachegefühle beschwichtigt werden können) (<42>)

「副文」は、「主文」の構成要素としては、「間接的な意味」すなわち「思想」を表すと同時に、副文単独では、「通常の意味」すなわち「真理値」を表す (<42>)。

「間接的な意味」に関しては、daßで導かれた副文 [①-a] ですでに取り上げられた。ここでは、副文は、「間接話法」と同様、「間接的な意味」として「思想」を意味するにすぎず、「真理値」を意味しておらず、また、そうであるが故に、「同じ真理値の他の文で単純に置き換えるわけにはいかない」とされたのであった。これと同じことが上の例についても指摘され、

「ベーベルは、アルザス-ロレーヌの返還によってフランスの復讐心を和らげることができると、思っている」(Bebel glaubt, daß durch die Rückgabe Elsaß-Lothringens Frankreichs Rachegefühle beschwichtigt werden können) (<42>)

とされ、副文が「間接的な意味」を有するとされるのである。

ところで、この引用文では、上の例の定動詞「錯覚している」(wähnen) が「思っている」(glauben) に書き換えられている。この書き換えによって、副文にとっては、ベーベルがそう思っていることだけが問題となり、その内容が真であろうと偽であろうと構わないという事態が生じている。これに対して、元の例文では、副文そのものの真偽が語られているのである。なぜなら、

「アルザス-ロレーヌの返還によってフランスの復讐心を和らげることができる」

が真であれば、ベーベルは真理を「知っている」(wissen)「認識する」(erkennen) のであって、真理はベーベルに「知られている」(es ist bekannt) のであって、ベーベルは「錯覚」してはいないか

らである。ベールが「錯覚している」とされる以上、副文は偽でなければならない。つまり、この場合の副文は、それ自身で偽（あるいは、定動詞次第では、真）という「真理値」を表しているのである。

以上のことから、副文は、「思想」と「真理値」という「異なった意味を伴う」ものとして、「本来二重に解されなければならない」とされ、置き換えが不可能とされるのである。

「真理値は副文の意味の全体ではないのであるから、副文を同じ真理値の他の文で単純に置き換えるわけにはいかない」(<42>)

最後に [②-b] 取り上げられるのは、「理由を示す副文と、それと結びついている主文とで、私たちはより多くの思想を表現する」場合である。フレーゲは、「氷は水よりも比重が小さいから、氷は水に浮く」(weil das Eis spezifisch leichter als Wasser ist, schwimmt es auf dem Wasser) を挙げ、ここに次の三つの思想が含まれていることを指摘する (<43>)。

「氷は水よりも比重が小さい」(das Eis ist spezifisch leichter als Wasser)

「あるものが水よりも比重が小さければ、それは水に浮く」(wenn etwas spezifisch leichter als Wasser ist, so schwimmt es auf dem Wasser)

「氷は水に浮く」(das Eis schwimmt auf dem Wasser)

なぜなら、「第一の思想と第三の思想を合わせても、また、第二の思想と第三の思想を合わせても、元の文の意義にはならない」からである。したがって、副文「氷は水よりも比重が小さいから」においては、「第一の思想が表現されているのみならず、第二の思想の一要素も表現されている」とされるのである。ここからは、容易に、「この副文を、同じ真理値の他の副文で単純に置き換えるわけにはいかない」という結論に至るのである (<43>)。

とはいえ、[②-b] では、[②-a] と同様に、副文が「真理値を意味する」という点も忘れるわけにはいかない (<44>)。この点を無視すると、上記の例は、副文を形容詞文に書き換え、「水よりも比重が小さい氷は水に浮く」(das Eis, das Eis spezifisch leichter als Wasser ist, schwimmt auf dem Wasser) となり、[①-b] と重なるからである。実際、フレーゲは、[①-b] で取り上げた次の例を再掲する。

「シュレスウィッチ・ホルシュタインをデンマークから奪った後、プロイセンとオーストリアは不和に陥った」(nachdem Schleswig-Holstein von Dänemark losgerissen war, entzweiten sich Preußen und Österreich) (<43>)

この副文は、①-b で指摘された「デンマークからのシュレスウィッチ・ホルシュタインの奪取後」という副詞句で置き換えられる「思想の要素」を表すだけでなく、「かつて、シュレスウィッチ・ホルシュタインがデンマークから奪われた」という「思想」をも表しているのである。そして、後者の「思想」は、当然、「真理値」を意味する。なぜなら、「ヨーロッパ史に対する知識不足から、〈かつて、シュレスウィッチ・ホルシュタインがデンマークから奪われた〉を偽とみなしている」人であれば、「命題の中に、自分が偽とみなす思想を見出すであろう」し、逆に、その知識を有する人にとってはこの「思想」は真であるからである。いずれにしても、この副文は、単に副詞句に置き換えられるだけでなく、

「真理値」をも表しているのである (<43>, *10)。

おわりに

フレーゲが副文を検討したのは、〈文の意味は真理値である〉という推察の当否を検討するためであった。フレーゲにとって、自らのこの推察は、文が完全である限りにおいてのみ妥当する。文が思想の一部しか担っておらず、不完全である場合には、また、文が過剰な役割を担っている場合、置き換えは成り立たない。しかし、置き換えが成り立たないことは、フレーゲに言わせれば、文が完全でないことを示すのみで、自らの推察の反証ではないのである。

注

- (1) テキストは、http://www.geocities.jp/mickindex/frege/frg_usb_gm.html (In: Frege, Gottlob: Funktion, Begriff, Bedeutung. Fünf logische Studien. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1994) による。各段落に番号を付し、〈 〉で括り、本文中に記す。全部で14個ある注にも通し番号を付し、番号の左肩にアスタリスクを付す。引用文中の [] は筆者の付加である。
- (2) Bertrand Russell, 'On Denoting' (in "Logic and Knowledge - Essays 1901-1950 -", Unwin Hyman, London, 1988)
- (3) 文の「意味」が規定されていないこの段階では、「意味」の〈変化しない〉という特徴だけでなく、さらに、「固有名」が「意味」を持つもの同様に、文が「名指す」「表示する」「意味」を、〈金星は太陽に照らされた物体である〉という事態とみなすのも一法かもしれない。すると、「宵の明星は太陽に照らされた物体である」が「名指す」「表示する」事態は、「明けの明星は太陽に照らされた物体である」と同じく、〈金星は太陽に照らされた物体である〉という事態であり、置き換えの前後で「意味」は変化しない。したがって、置き換えが「文の意味に影響を及ぼすことはありえない」ことになる。しかし、すぐ後でみるように、フレーゲにとって文の「意味」は、文によって記述される事態ではなく、「真理値」である。「命題の真理値を、私は、その命題が真である事態、あるいは、その命題が偽である事態と解する」(Ich verstehe unter dem Wahrheitswerte eines Satzes den Umstand, daß er wahr oder daß er falsch ist.) (<15>)の「事態」は、文が記述している外界の有り様ではなく、その文が〈真である〉あるいは〈偽である〉ということだけである。そして、このことは、外界の有り様が別のものに置き換えられても、決して〈変化しない〉のである。「まったく普遍的にいかなる命題にも属し、そもそも命題の構成要素の意味が問題となり、上述のような置き換えに際して不変であるようなものが、真理値以外に何か見出されうるとでもいうのか。」(Was sonst als der Wahrheitswert könnte auch gefunden werden, das ganz allgemein zu jedem Satze gehört, bei dem überhaupt die Bedeutung der Bestandteile in Betracht kommt, was bei einer Ersetzung der angegebenen Art unverändert bliebe?) (<17>) やはり、ここの「意味」に「名指す」「表示する」事態と解するのは、たとえば方便としても、無理筋のようである。あくまでも〈変化しない〉という特徴に留めておくべきであろう。
- (4) フレーゲは、「記号」とその「意義」と「意味」との「規則的な結びつき」を「一つの記号には特定の意義が対応し、この意義には特定の意味が対応する」(daß dem Zeichen ein bestimmter Sinn und diesem wieder eine bestimmte Bedeutung entspricht) (<4>) と述べている。〈記号

→意義→意味)これと対応させれば、文とその「意義」と「意味」も〈文→意義(思想)→意味(真理値)〉ということになるであろう。もっとも、同時に、フレーゲは、「しかしその一方で、一つの意味(対象)にただ一つの記号が属するわけではない」とも、「同じ意義が、様々な言語で、それどころか同じ言語においても、様々に表現される」とも述べており、上図の矢印を左向きにした「結びつき」が成立しないことを認めている(<4>)。したがって、「思想へと戻る」というのは、真理値から個別的な「思想」へ矢印を逆方向へたどるということではなくて、個別性は「思想」レベルでの問題だということであろう。「表示対象から意味への戻り道」(backward road from denotations to meanings) (Russell, op.cit. p.50)をフレーゲが認めているわけではない。

- (5) ここから、フレーゲは、「したがって、私たちは、語の通常の意味と間接的な意味とを区別し、通常の意味と間接的な意義とを区別する」(<6>)と述べるのであるが、語の「間接的な意義」が何であるのか、筆者には不明である。
- (6) 「直接的な意味」と「直接的な意義」に対して「間接的な意味」と「間接的な意義」を区別するというフレーゲの方針に従えば、副文の「意味」を「間接的な意味」とする以上、「間接的な意義」も認められなければならない。フレーゲは、語句と「間接話法」の「間接的な意味」に関して一言も言及していないが、副文に至って初めて「間接的な意味」に言及する。

「[また、] 意義として有するのは、思想ではなくて、『…という思想』(der Gedanke, daß...) という語句の意義である。そして、これは、複合文全体の思想の要素でしかない。」(<20>)

「…という思想」とは副文の「間接的な意味」であろう。したがって、「間接的な意義」とは、「間接的な意味」へと向かう〈何か〉ではあろう。ラッセルに倣って「意味を表示する何か」(something which denotes the meaning) (Russell, op.cit. p.50)とでも言う他ないが、それが何であるかは、筆者には不明である。

- (7) フレーゲは、「何かを主張する場合、〈そこで用いられている固有名は、単純な固有名であれ、複雑な固有名であれ、意味を有している〉という前提は、常に自明である」(<28>)と言う。つまり、「惑星の軌道が楕円形であることを発見した人」という「複雑な固有名」も、「ケプラー」という「単純な固有名」も、ケプラーを指示対象(「意味」として)として持っており、このことは、「ケプラーは悲惨のうちに死んだ」を「主張」するにしても、その「反対」を「主張」するにしても、「前提」なのである。しかし、その一方で、フレーゲは、これら「固有名」が「何ものかを表示する」という「思想」(<28>)を含むことを否定するのである。
- (8) 副詞文が文ではなくて句であることからすれば、名詞文や形容詞文と同様、「意義」も「意味」も有さないことになるはずである。しかし、フレーゲは、直接この点に言及する代わりに、次のように述べている。

「ここでも次のことに注目すべきである。こうした副文の意義を、主文において言い表すことはできない。なぜなら、[主文は、] 本質的な構成要素、すなわち、場所の規定あるいは時間の規定を欠いているからである。[というのも、] これらの規定は、関係代名詞、あるいは、継合詞 (Fügewort) [機能語としての接続詞・前置詞] によってただ示唆されているだけだから。」(<31>)

問題は、「こうした副文の意義」(der Sinn dieser Nebensätze)であろう。文字通りに読めば、「こ

うした副文」は副詞文であり、副詞文が「意義」を有することになる。しかし、副詞文は「固有名」として扱われ、「固有名」としての「意味」は「対象」である。そうであれば、ここでの「意義」は、「対象」を「意味」とする語句の「意義」でしかなく、副文の「意義」すなわち「思想」ではない。そうであれば、ここでも、フレーゲは、副文が文としての「意義」すなわち「思想」を有していないことを示唆している、と考えられる。

- (9) フレーゲが挙げる第二の例「太陽が蟹座の回帰点 [北回帰線] にある場合、北半球では一日が最も長くなる」(Wenn sich die Sonne im Wendekreise des Krebses befindet, haben wir auf der nördlichen Erdhälfte den langsten Tag) は、一見すると、「時」の副詞文のようにもみえる。このように解すると、この「現在時制」は「現在」を表していることになる。しかし、この例文は現在の状況の記述ではない。ここで示されているのは、フレーゲによれば、「無規定的」な「ある時点」なのである。さらにいえば、この「無規定性」が、第一の例と同様、「法則」の「普遍性」を担うのである (<32> ~ <33>)。

Abstract

Sinn und Bedeutung bei Frege

Yoshiaki OGAWA

Gottlob Frege (1848-1925) sieht sich auf die Schwierigkeit der Gleichheit (Identität) gegenüber, denn in $a=b$ drückt die Gleichheitszeichen (=) die Gleichheit der Zeichen a und b aus, und zugleich sind die Zeichen a und b voneinander verschieden.

In der „Sinn und Bedeutung“ (1892) unterscheidet er den Sinn und den Bedeutung eines Zeichens, der erste drückt die ‚Art des Gegebenseins des Bezeichneten‘ und die letzere den Gegenstand, den das Zeichen bedeutet. Diese Unterscheidung wendet er auf die Sätze: der Sinn eines Satzes ist der Gedanke und die Bedeutung der Wahrheitswert.

Wenn die Bedeutung eines Zeichen oder Satzes betrifft, so muß, nach Freges Voraussetzung, die Ersetzbarkeit bestehen. Aber es gibt Ausnahme, wenn der Satzteil oder Teilsatz in der geraden oder ungeraden Rede auftritt. So betrachtet Frege von allen Seiten, ‚ob von den Nebensätzen gleichfalls gilt, daß Bedeutug ein Wahrheitswert sei.‘